政府による土地森林分配事業及びゴム栽培導入が農村経済に与える影響

――自給的焼畑農業から商業的定着農業への転換に注目して――

平成 18 年入学
派遣先国：ラオス人民民主共和国
川江　心一

キーワード：ラオス北部山岳地帯，土地森林分配事業，ゴム栽培，自給的焼畑農業，商業的定着農業

対象とする問題の概要

ラオスは国土の約 80%が山岳地帯に属し，北部では陸稲作中心の伝統的焼畑農業が営まれてきた。伝統的焼畑農業においては明確な土地所有権が存在しない。各農家は広範な森林内を移動し，森を切り開くことにより，自給的農業を営んできた。

しかし，1996 年以降，政府は森林保全を目的として，各農家に 2~3 区画（1 区画当たり約 1ha）の農地を割り当て，森林利用を制限することにより，焼畑農業の定着農業化を推進してきた。限られた土地区画の中では，自給用作物の十分な生産が不可能となり，食料購入のための現金所得が必要となった。その結果，商品作物の栽培が拡大し，なかでもゴム栽培は特に広がっている。それは，中国のゴム需要拡大とそれに伴う価格高騰による影響が大きい。

焼畑に利用されている森林

ゴム栽培は，多くの初期労働投入と多額の初期投資が必要である。それは，植林の際，苗木を購入し，斜面に階段状のテラスを造らなければならないからである。焼畑民族における富裕層は世帯内労働力人口が多く，資本も豊富なことから，ゴムの単一栽培へと生業転換を進めている。一方，貧困層は世帯内労働力人口が少なく，資本も限られているため，依然陸稲栽培を続けている。

人々の生業が変化し，各層が特定の生業手段に特化するなかで，経済格差拡大の傾向が見られる。

土地森林分配事業による土地の利用区分を示した看板

山の斜面一面に植えられているゴムの木

研究目的

本研究の目的は，政府による土地森林分配事業及びゴム栽培導入が，焼畑民族の生業にどのような変化をもたらしているかを明らかにすることである。生業変化や世帯ごとの所得構成を分析することにより，村落内の経済格差拡大について検証する。

ラオス北部は，自給的焼畑農業から商業的定着農業への転換を実現した数少ない事例の一つである。他の途上国政府も同様の転換を推進しているが，大部分はまだその実現に至っておらず，焼畑民族の生業変化に伴いどのような経済学的問題が起こるのかについては不明な点が多い。今後多くの国で商業的定着農業への転換が実現すると予想されることから，まずはその問題点を明らかにすることが重要である。そのためには，ラオス北部において，焼畑民族の生業変化に関する経済学的調査を実施する必要があるが，未だ十分に研究されたとはいえない。従って本研究では，農家経済調査を実施し，生業変化や世帯ごとの所得構成を分析することにより，村落内経済格差の現状を明らかにする。

フィールドワークから得られた知見について

今回の派遣では，本調査に向けて，調査許可の取得，国際ワークショップへの参加，及び予備調査を行った。ラオス国立大学林学部を通して調査許可の取得手続きを行い，4 月下旬には調査用ビザと外国人用 ID カードが発行される予定である。

2007 年 11 月 30 日，12 月 1 日には，北部ルアン・ナムター県で開かれた，「ラオス山岳地帯における自然資源の持続的利用」に関するワークショップに参加した。その時，ラオス国立農林業研究所の社会経済学部門に所属する研究者と意見交換を行うことができた。その後，彼らからゴムに関する統計資料や調査報告書の提供を受けた。

さらに，調査予定地である北部三県（ルアン・ナムター県，ウドムサイ県，ルアン・パバン県）を訪れ，予備調査および調査村の選定を行った。土地森林分配事業は，県や郡の農林事務所が置かれている市街地近郊から順に実施されているため，アクセスの悪い遠隔地の村までまだ到達していない。土地森林分配事業が実施されていない山奥の一部の村では，焼畑の他に生計手段はないが，市場経済の浸透により現金所得の必要性は増しており，商品作物栽培が拡大してきている。その結果，過度な焼畑による森林の荒廃が進んでいる。一方，土地森林分配事業が実施された村では，森林が回復してきている。しかし，陸稲は水稲に比べ収穫量が少ないため，水田のない村では，自給用の米が不足するという問題が起きている。

過度な焼畑の拡大により荒廃した森林

大きな水田面積を持ち，土地森林分配事業が実施された村では豊かな森林が残る

ゴム栽培の導入時期は，民族や道路からのアクセスの良さによって異なることから，いくつかの村を

訪れ，それぞれの立地条件，民族ごとに，導入時期のパターン化を行った。これまでに得られた結果から，ルアン・ナムター県の市街地近郊に位置するハートニャオ村，もしくはその近郊村において本調査を実施することを決めた。ハートニャオ村は 90 世帯からなる白モン族の村であり，ラオス北部において最初にゴムが植えられた村であることが調査地として選定した理由である。

ハートニャオ村で収穫が既に開始されているゴム林，ラオス北部で収穫が始まっているゴム林はまだ少ない

今後の展開・反省点

今回の派遣では，予備調査が主な目的であったため，論文執筆のための本格的な調査はまだ行っていない。また，ラオス語を十分に習得していなかったため，ゴム栽培に関する村落ごとの詳しい現状については聞き取りを行えなかった。従って，本調査実施前には，語学研修を行う。語学習得後，本調査において，ゴム栽培とそれ以外の生業に関するインタビュー調査を実施する予定である。

さらに，今回の予備調査で得られた知見をもとに，土地森林分配事業によりどの程度森林が回復しているかについての植生調査も実施したい。その際には，地域住民の森林利用という視点を軸として，彼らにとって利用価値のある森がどのように遷移しているかを明らかにしたい。